

死別

わかるとてよめる、おとは山木だかく鳴てほと、ぎす君がわかれをしむべらなり、とある
を見るべし、君をとめよ、君がわかれをといへる、みな人のわかれゆくさまなり、

〔南總里見八犬傳 三輯三〕第廿五回情を合て濱路憂若を訟ふ、奸を告て額藏主家に還る、

濱路は臉泣腫し、聞きかたより見かへれど、涙に霞む狭山形紙張の壁に、身をよせて、おのが臥房
に泣にゆく、現悲しきは死別より生別にますものなし、

〔殉難前草〕

梅田源治郎定明

妻臥病床兒呼飢、一身立欲拂戎夷、今朝死別兼生別、唯有皇天后土知、

告別

〔日本書紀神代〕於是素戔嗚尊請曰、吾今奉教將就根國、故欲暫向高天原與姉相見而後永退矣、勅許
之、乃昇詣之於天也、

〔平家物語七〕忠のりの都おちの事

薩摩のかみたゞのりは、いづくよりか歸られたりけん、さぶらひ五騎、わらは一人、我身ともにひ

たかぶと七騎取て返し、五條の三位俊成の卿のもとにおはして見給へば、門戸を閉てひらかず、

略○中 俊成の卿其人ならばくるしかるまじ、あけて入申せとて、門をあけてたいめん有けり、事の

ていなにとなう物あはれ也、略○中 さつまのかみ、略○中 さらばいとま申してとて、馬に打乗り、かぶ

とのををしめて、西をさしてぞあゆませ給ふ、三位うしろをはるかに見をくつて立れたれば、た

だのりのこるとおぼしくて、前途程遠、思ひを雁山の夕の雲に馳と、高らかに口すさみ給へば、俊

成の卿も、いとあはれにおぼえて、なみだををさへて入給ひぬ、

〔源平盛衰記 三十四〕東國兵馬汰并佐々木賜生、嗟附象王太子事

近江國住人、佐々木四郎高綱、佐殿源頼朝ノ館ニ早參シテ所存アル體ト覺ヘタリ、兵衛佐宣ケルハ、

如何御邊ハ、此間ハ近江ニ在國ト聞ハ、志アラバ軍兵上洛ニ付テ、京ヘゾ上給ハンズラント相存